

第20回 河北郡一向一揆と加賀木越の合戦



河北潟から周囲に湖水を引き込み一村要塞化した加賀木越合戦の地（金沢市：左が馬渡川、右が血の川）

戦国末期の元亀元年（1570）9月、大坂石山の本願寺11世顕如光左が、諸国の同寺門徒に蜂起を促し、次いで一向一揆勢が、摂津国海老江に在陣していた織田信長方を夜襲したことから「石山合戦」が始まった。以来11年間の長きにわたって、本願寺・一向一揆方と信長との間で戦闘が展開されたが、天正8年（1580）3月17日に至り、前左大臣近衛前久の仲介による正親町天皇の勅命によって、講和が成立した。

信長は、勅命を奉じて顕如を赦免し、顕如の大坂退城と、既に占拠していた加賀国江沼・能美両郡の本願寺への返付等を含む誓書を天皇に送り、本願寺と和睦する旨を誓った。

一方、顕如も翌閏3月5日、本願寺の坊官と共に、信長との和議を天皇に誓約した。顕如は、同年4月、石山本願寺より紀伊国鷺森（現和歌山市）に退去し、ここに石山合戦は終結する。しかしこれは、本願寺・一向一揆の信長への屈服を意味した。

に陣を取り、諸所に放火した後、同郡野々市に拠る一向一揆勢を討ち取って追い払い、多くの船や兵糧米等を分捕ったと、『信長公記』にみえている。

その後柴田軍は、次第に北加賀の平野部を焼き払いながら河北郡から国境を越えて越中の安養寺（現小矢部市）付近まで攻め進んだ。そうした状況のなかで、信長は同月11日付で、本願寺顕如に、南加賀の江沼・能美両郡返付の約束を伝える一方で、北加賀に進軍中の柴田勝家に、本願寺との和議成立を報じ、加賀における一向一揆方との休戦を命じた。

しかし信長の休戦命令が、勝家の陣営に届いたのが、11日から数日を経た後であつたらしく、未だその報に接していなかった柴田軍の部将佐久間盛政（勝家の甥）は、密かに河北郡一向一揆の軍事的拠点となっていた同郡木越の攻略を目論んでいた。

佐久間盛政の木越攻略

閏3月14日、佐久間盛政勢による一向一揆方の木越砦攻撃が、不意に敢行された。このとき佐久間勢に、

織田方柴田軍の北加賀侵攻

だが信長と本願寺の和睦が、未だ現地に伝わっていなかったため、閏3月5日、織田方の越前柴田勝家軍が、手取川を越え、北加賀の石川郡に侵攻した。勝家は同郡の宮腰（現金沢市金石地区）



※1 「(天正8年)閏3月30日付織田信長黒印状」(長家文書、長和連氏蔵、穴水町歴史民俗資料館保管)

能登からやってきた織田方の長連龍ちようつらたつ勢が加勢した。

木越光琳寺の奮戦